

きつねに化かされた旅人

むかし、横根山の辺りは、それはさびしい野山でした。家など一軒もありませんでした。そこには、一本の大きな松とたいへん清らかな泉がありました。

ある日の夕方、この野山をひとりの旅人が通りかかりました。旅人は、日がくれないうちに横根村の中村に着こうと急いできたのです。

「ずいぶんうす暗くなってきましたしまったなあ。」

と、ひとりごとをいいながら、泉でのどをうるおしました。それはそれは、とてもおいしい水でした。辺りはすでにうす暗くなり、通りかかる人もなく、さみしくなりました。そればかりか、旅のつかれも出てきました。

「急いできたのに、こんなところで日がくれてしまった。これは困ったことになったなあ。この先は……。」

この先は、七曲がりの道や座頭なかせといわれる険しい道です。

「こんなにつかれてしまっいては、とても危なくて座頭なかせは歩けない。それにこんなに暗くなっちゃあなあ。」

旅人は、どこかに一晩^{ぼん}とめてもらえる家はないだろうかど、人家を探^{さが}そうとしました。でも、こんなさびしい山奥では家などあるわけありません。

「このままでは、野宿でもしないといけなくなってしまうぞ。」

と、旅人は困りはてて、松の根元に深々とこしをおろしました。辺りは、ますます暗くなってきました。

「さて、これからどうしたものか。」

と、とほうにくれていると、遠くの方にぼんやりと人家らしい明かりが見えました。

「おや、ぜんぜん気がつかなかったが、あんなところに家があるぞ。これは大助かりだ。よかった。よかった。」

と、小走りで明かりに近づきました。そこには、こんなさびしい山の中にもかかわらず、立派な屋敷^{やしき}が立っていました。旅人は喜んで戸をたたきました。すると、中から若くてとても美しいむすめさんが出てきました。旅人は、

「旅の者ですが、途中^{ちゆうちゆう}で日がくれてしまい困っています。一晩とめていただくことはできないでしょうか。」

と、事情^{じじょう}を話しました。

むすめさんは、美しいうえにたいへん親切な人でした。

「それは、お困りなことでしょう。中へ入って、ゆつくりしてください。」

と、旅人をむかえ入れてくれました。立派な屋敷と美しいむすめさんに、旅人はうれしくなりました。むすめさんは、風呂ふろをわかし、旅人にすすめてくれました。旅でつかれ、冷えきった体の旅人には、温かい風呂は何よりもうれしいもてなでした。

「こんなに親切にしていたいただいて、本当にありがとうございます。では、さっそくお風呂に入らせていただきます。」

と、ていねいにお礼をいって、温かい風呂に入りました。体がだんだん温まってきた旅人は、しだいにねむくなってきました。いつしか、風呂の中でうとうといねむりを始めました。



どれほどたつたのか、旅人はやつと目を覚ましました。しばらくは、何が起こったのかまったくわかりませんでした。立派な屋敷もありませんし、美しいむすめさんもいません。夢でも見ているようでした。

自分が温かい風呂だと思つて入っていたのが、あの松のわきにあつて、自分がのどをうるおした泉だということがだんだん分かつてきました。冷たい泉に入っていることが分かると、旅人はとたんに寒くなり、大きなくじやみをしました。あわてて着物をきた旅人は、はつと気づきました。みやげに持っていた干し魚ほがなくなっていたのです。

「やられた……。」

実は、旅人は、きつねに化かされていたのです。

横根地区に伝わる話です。

横根山は、県道名古屋刈谷線の梶田交差点を中心とした辺り一帯をいいます。きつねは、警戒心が強いことや顔たちがずる賢さを感じさせることから、人をだましたり化かしたりする動物とされてきました。